

# 和傘づくり

日本人は天気についての関心が高いという。また、雨についての言葉も豊富だし、雨を歌った歌も多い。これも雨の多いわが国の気候風土に基づくものだ。そして、傘といえば雨傘をさし、竹と紙の傘を雨傘に定着させたのも、この風土の中に産み出した日本人の知恵なのだ。蛇の目傘は、雨傘に美を追い求めた先人たちの美意識の所産であり、その使い手までも美しく見せてくれる。北原白秋の「ジャンメデ オムカイ ウレシイナ」は、蛇の目に映える母親の姿を歌ったものだ。

## 1 和傘の起源

傘の起こりは、貴人にさしかけた大傘や絹笠(蓋)だという。自分でさす個人用の傘は、すでに鎌倉時代にみられるが、現在の和傘の原型は、スペインとの貿易によってルソンから伝えられたという。江戸時代になると、まず、堺・大坂・江戸などで和傘の生産が始まり、やがて各地に普及して発展した。

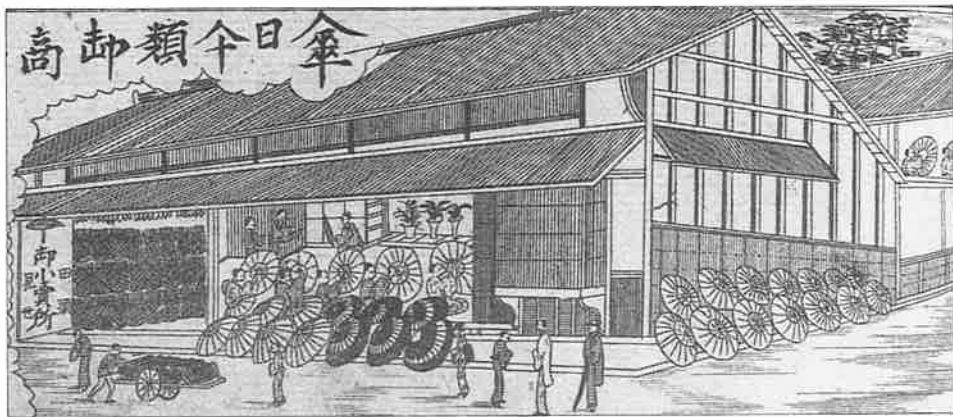
和傘をカラカサというのは、唐から伝えられたとか、柄(え)のついた傘とか、ロクロ細工のカラクリ傘の意だとか、様々な説がある。



キヌガサ

## 2 広島における和傘づくり

広島における和傘づくりの歴史は古く、元和5年(1619)、浅野長晟が藩主として広島に入国した際、和歌山から移住して藩の傘御用をつとめた傘屋庄右衛門に始まると伝えられている。安永9年(1780)、広島から他国に移出した傘は、13万本に及ぶという資料もあり、盛んな傘づくりの様がうかがえる。また、幕末期における広島城下の傘職人は、ロクロ師や傘張骨師などを合わせると約130人を数え(『知新集』)、藩も積極的に助成していた。



和傘の卸商の様子

『広島諸商仕入買物案内』(明治16年刊)小谷 進氏蔵

明治の初めころから、洋傘が普及し始めるが、和傘の生産は続けられ、生産量からみると、むしろ大正の初めころが最盛期であった。その後、しだいに衰退していくが、第二次大戦中に再び活気を取り戻し、市内で、30軒以上の傘屋さんで番傘を作っていたという。戦後の復興が進むにつれて、洋傘に圧倒されていった。

### 3 和傘づくりの技術

#### (1) 骨組み

メダケの軸に、エゴノキで作った2個のロクロをはめて、止め金のハジキを取り付けた後、ロクロにマダケで作った骨を結びつける。紙を張る長い骨をオヤボネ、その支えとなる短い骨をコボネと呼び、オヤボネは上ロクロに、コボネは下ロクロに取り付ける。

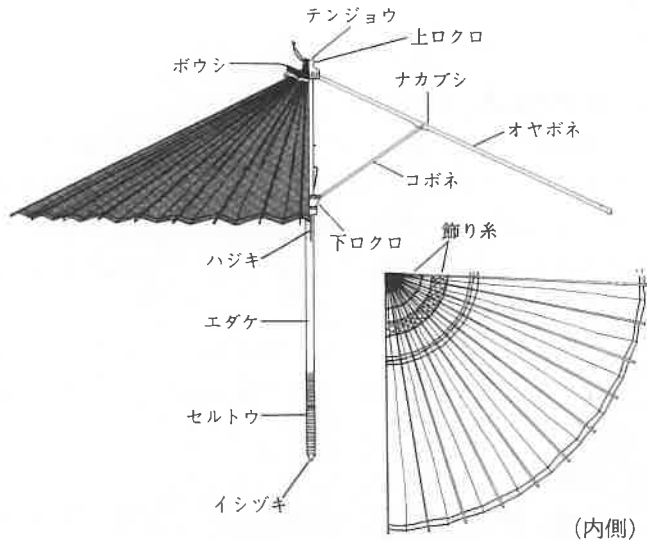
#### (2) 和紙張り

オヤボネとコボネをつなぎ合わせた糸の上に2、3枚の和紙を張る。次に三角形の紙を1枚ずつタピオカノリで張っていき、骨からはみ出した紙は裁ち落とす。

1日乾かした後、円形の天井紙を張り、ついで傘を閉じて折り目をつけ、さらにローラーをかけるなどして、傘としての丸味をもたせていく。

#### (3) 防水加工

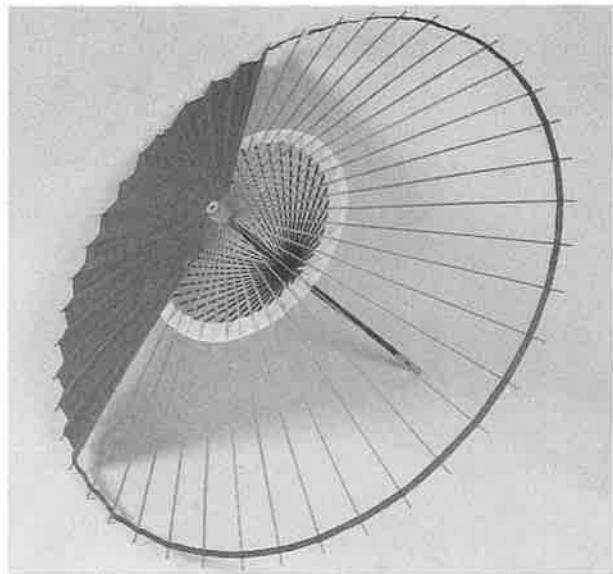
傘を広げ、灯油にアマニ油を混ぜたものを軽く塗り、さらに番傘の場合、色付けとして、ベンガラに柿シブを混ぜたものを塗る。ついで傘を閉じ、表面にハケやローラー、スポンジなどでウルシを塗る。その後で、ボウシをかけ、糸でコボネに飾付けを行う。



和傘各部の名称



ロクロ



和紙張り

三角形の和紙をタピオカノリで張っていく